

【報 告】

瞳みのる One Day ひとりタイガースの衣装製作について

— 「モナリザの微笑」 衣装の完全再現 —

木村知世、鈴木春佳、今井悠瑚、海老名理紗子、
玉利舞花、中澤聡美、横森千佳、田中あゆみ**Making of Costumes for *Minoru Hitomi One Day alone Tigers*
Perfectly reproduced costume of “*Mona Liza's Smile*”**KIMURA Chise, SUZUKI Haruka, IMAI Harukako, EBINA Risako,
TAMARI Maika, NAKAZAWA Satomi, YOKOMORI Chika, and TANAKA Ayumi**要旨**

服飾造形学科では産学官連携の一環として、2019年7月15日に和洋九段女子中学校高等学校講堂で開催されたコンサート「瞳みのるOne Dayひとりタイガース」の衣装製作を行った。この取り組みは、1967年に発売されたザ・タイガース3枚目のシングル「モナリザの微笑」の衣装を完全に再現し、現在に蘇らせるというものである。当時実際に着用された衣装は現存不明なため、写真などの資料から素材やパターンを推測し製作を行った。これらの活動を通して、専門分野の知識や技術の活用と連携、スケジュール管理や人材育成の経験を積むことができ、大きな教育効果を期待できることが確認できた。

本稿ではザ・タイガースのメンバー瞳みのる氏を中心としたOne Day special bandメンバーのフィッティングの様子を含め、素材の検討、パターン作成、トワル組み、本縫い、ベルトの製作、仕上げ完成までの様子を報告する。

キーワード：衣装制作、舞台衣装、ザ・タイガース、衣服構成、産学官連携

1. はじめに

本学では社会で活躍する総合力を持った学生を育む取り組みとして、産学官連携に力を入れている。学生は企業や地域との関わりを通じ実際に体験することで、授業だけでは得られない社会人としての力を身につけている。本学服飾造形学科の学生においては、将来就きたい職業としてデザイナーやパタンナーなどを挙げる事が多く、産学官連携の一つとして外部と関わりながら衣装製作をする機会を設けることは、学生にとって有益であり、高い教育効果が得られると考えられる。しかしながら、外部からの依頼は授業とは違い、製作品の品質や納期の厳守など懸念されるべき要素が多いため実際に導入するためには教員自身の経験や指導力が必要である。そこで、今後の基盤づくりとして服飾造形学科教員と助手で外部の依頼を受け衣装製作に取り組むこととした。

本報では、2019年7月に開催されたコンサート「瞳みのる One Day ひとりタイガース」の衣装製作に

ついて報告する。

2. ザ・タイガースと製作衣装について

2019年7月15日に開催された、瞳みのる氏コンサート「瞳みのる One Day ひとりタイガース」の衣装を製作した(写真1)。瞳氏は1967年から1971年に活躍した日本のグループサウンズバンド「ザ・タイガース」の元メンバーである。

今回製作した衣装はザ・タイガース3枚目のシングル『モナリザの微笑』のユニフォームであり、これはタイガースのユニフォームの中でも特に有名な一着と言われている。デザインの原案はファンからの公募であり、それを東京・飯倉のブティック「ベビー・ドール」の経営者である川添梶子がアレンジした^[1]。

本公演は当時のザ・タイガースを再現することを主にしているため、衣装も当時の物を完全に再現することを目指した。



写真1 コンサートのチラシ

3. プロジェクトスケジュール及び役割分担決め

オリジナルメンバーの瞳みのる氏以外は、本コンサート限りのOne Dayバンドメンバーが代役を務めた(表1)。プロジェクトの製作スケジュールを表2に、役割分担を表3に示す。依頼があった3月時点で、ジャケット、ジャケットのクルミボタン、ベルトは製作を行い、パンツは既製品を補正することが決定した。10名を2チームに分け、ジャケット製作担当7名、パンツ補正・付属品とベルト製作担当3名で分担した。ジャケット製作は、塚本教授の指導の下、パターン製作とトワル製作は担当者が先行して行った。ステージで着用する6名のジャケットはひとり1着を担当した。ジャケットに付属するクルミボタン製作、パンツ補正、ベルト製作担当では、3名が並行して作業を進めた。

表1 メンバー対応表

ザ・タイガース(愛称)	One day バンド
沢田研二氏(ジュリー)	星一シン(稲村)氏
岸部修三氏(サリー)	手島正揮氏
加橋かつみ氏(トッポ)	Kosuke(石橋)氏
森本太郎氏(タロー)	柿嶋潤氏
	金子健彦副学長 (オリジナルメンバー)

表2 プロジェクトの流れ

年	月	内容
2019年	3月	<ul style="list-style-type: none"> 本学副学長から依頼 製作メンバー決定 ザ・タイガースと衣装についての調査 役割分担決め パターン製作 シーチング仮縫い
	4月	<ul style="list-style-type: none"> フィッティングと補正 布地、芯地の検討、購入
	5月	<ul style="list-style-type: none"> 布地の裁断 芯貼り 縫製
	6月	<ul style="list-style-type: none"> 仕上げ 衣装納品
	7月	<ul style="list-style-type: none"> コンサート本番

表3 製作の役割分担について

	瞳氏	石橋氏	稲村氏	柿嶋氏	手島氏	金子氏
パターン製作	塚本/鈴木/田中					
トワル製作	塚本/木村/鈴木/田中					
ジャケット	木村	横森	中澤	今井	鈴木	田中
ボタン	海老名/玉利					
パンツ丈詰	嶋根/海老名/玉利					
ベルト	嶋根/海老名/玉利					

4. 製作工程

4-1. パターン製作

当時の写真(写真2)^[2]を元に、ジャケットのパターン製作を行った。当時の衣装は、ザ・タイガース=王子様というファンのイメージを形作っている中世ヨーロッパの貴公子風のコスチュームであった^[3]。ジャケットの特徴は、ベルベットの素材、三面構成、詰襟、腰丈、体にフィットしたシルエット、しっかりとした肩の形状である。4月までに6名のチェスト、ウエスト、ヒップの寸法から、チェスト87cm、90cm、92cmのパターン製作とトワル製作を行った。パターン製作は、文化出版局 文化ファッション講座「男子服」文化服装学院編と文化出版局 文化ファッション体系服飾造形講座「メンズウェアⅡ(ジャケット・ベスト)」を参考に行った。チェスト87cmのパターンを図1、図2に示す。

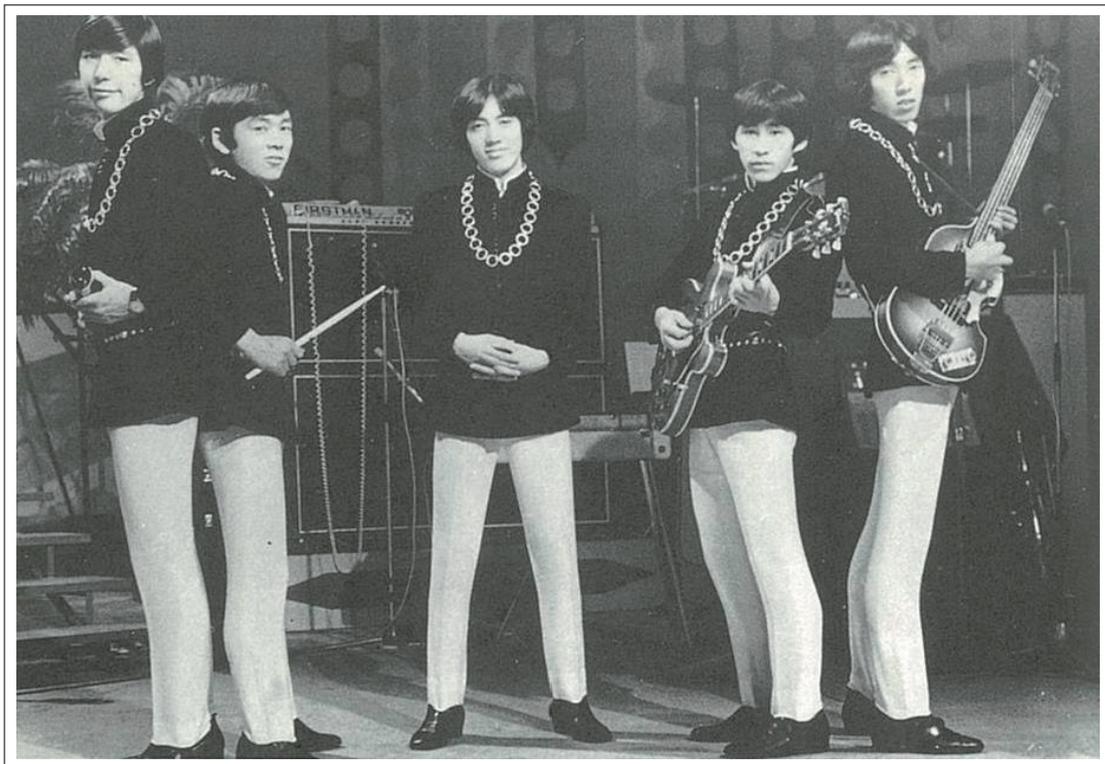


写真2 当時の衣装

左から、森本氏(タロー)、瞳氏(ピー)、沢田氏(ジュリー)、加橋氏(トッポ)、岸部氏(サリー)

4-2. トワル製作

チェスト87cm、90cm、92cmの6着すべてのトワル製作を行った。4月に瞳氏のフィッティングを行い(写真3)、ウエストから腰に掛けての広がり、袖ぐり位置の修正を行った。フィッティングの前・後のパター

ンを図1～3に示す。当時のイメージに近付けるため、腰から裾にかけての広がりの傾斜を強めた（図3 ※1）。また、より立体的なシルエットにするため脇身頃の幅を1cm追加した（図3 ※2）。そして、前胸幅を1cm広げ（図3 ※3）、不自然なしわや腕の動かしにくさを回避した。

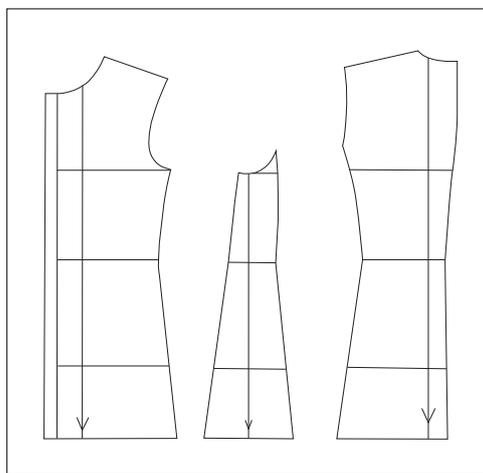


図1 ジャケットのフィッティング前パターン

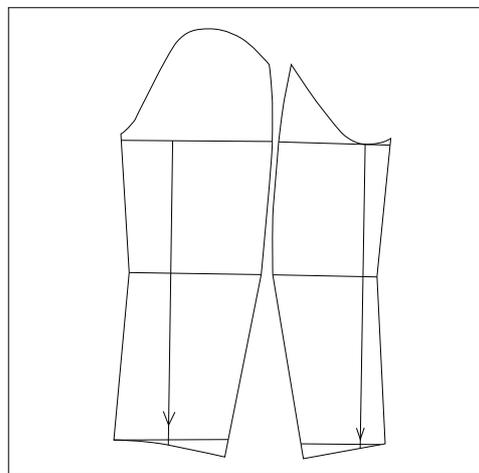


図2 袖パターン

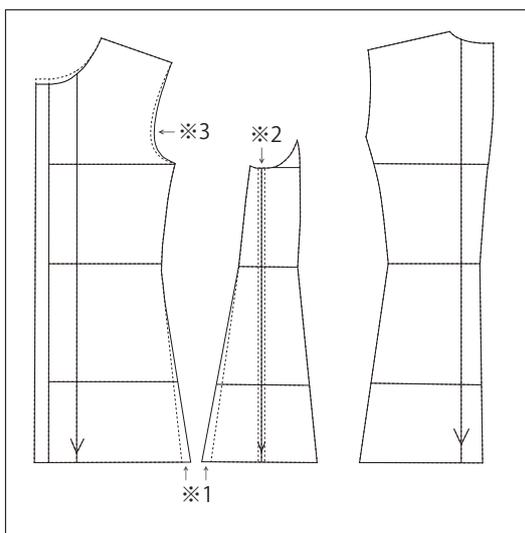


図3 フィッティング後修正済みパターン



写真3 瞳みのる氏トワルフィッティング

4-3. 素材の検討

4-3-1. ジャケットの素材について

先方からの依頼は表地にベルベットを用いての製作であったが、ベルベットではなくベロアの風合いの方が当時の衣装に近いと判断した。そのため、クラッシュベロアとベロアの2種類を提案した（写真4）。その結果クラッシュベロアはランダムな光沢感が強く完全再現とはいえないため、ベロアを使用することにした。

裏地はコート用を使用した。扱いが難しいベロアと縫い合わせることを考え、通常のジャケットで使用するものよ

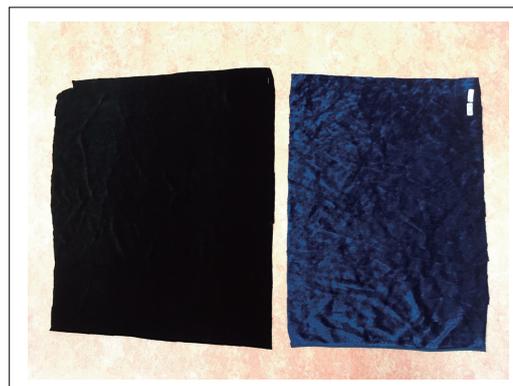


写真4 ベロア（左）とクラッシュベロア（右）の比較

りも厚く張りのある裏地を使用した。これにより技術面での負担を抑えた。

4-3-2. 芯地の接着テスト

表地には事前に芯地の接着テストを行った。はじめに写真5のように10cm×10cm程度の大きさで接着芯をカットし、表地に接着した。左からアピコAM200、アピコAM300、アピコAM100、ステーフレックス660を接着した。その中で芯地剥離がなく布地に影響の少なかったアピコAM300とステーフレックス660を大きな布地で再度テストを行った(写真6)。しかし大きな布地では芯地剥離が見られた。

そこで新たにアピコAM600をテストに用いた。実際に製作するジャケットは前身頃では接着芯を二重貼りにするため、接着テストでは一重貼りとは二重貼りを試した(写真7)。その結果、芯地剥離が起きないことが確認されたため、アピコAM600をジャケットの芯地として使用することにした。尚、テストは白地で行っているが実際の製作には黒を使用した。



写真5 小さいサイズでの接着テスト



写真6 アピコAM300(上)とステーフレックス(下)

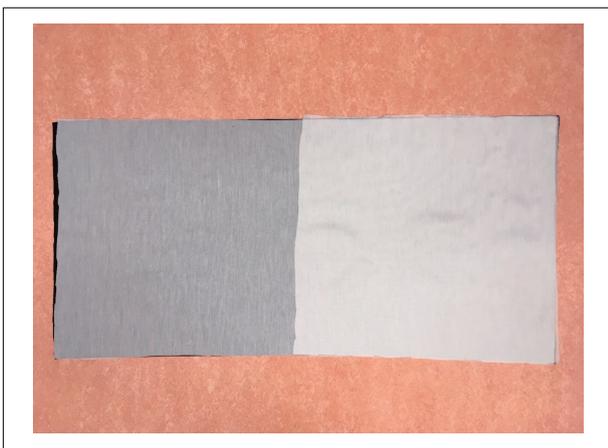


写真7 アピコAM600一重貼り(左)、二重貼り(右)

4-4. 裁断

ステージ上でライトが当たった際にジャケットが白光しないよう、ベロアは逆毛で使用した。予めパーツごとに要尺を計算し、布地を粗裁ちした。表地には粗裁ちの状態に接着芯を貼った。その後パターンを重ねパーツごとに裁断した。以上の流れを踏むことで作業効率の向上を図った。

4-5. 縫製

縫製の作業内容を表4に示す。

表4 縫製の作業内容

パーツ	作業内容	作業の写真
身頃	<ul style="list-style-type: none"> ・身頃を縫い合わせた。 ・縫いずれしやすい素材のため、一方向からではなく両方向からピンで留め、縫いずれを抑えた。 ・立体的な仕上がりになるように、肩の前後差1cmはテンションをかけながら縫った。 	
袖	<ul style="list-style-type: none"> ・内袖と外袖を縫い合わせた。 ・当時の肩の形状を再現するため、袖はいせ分量を8cmにした。 ・袖付け線から0.2cmと0.5cm縫い代側に2本ぐし縫いを行い、肩先の丸みを形作った。 	
裏布	<ul style="list-style-type: none"> ・前、後ろのパネルライン及び後ろ中心にきせをかけた。 ・袖も身頃と同様、きせをかけた。 ・つれないよう、ウエストとエルボーラインに切り込みを入れた。 	
表布と裏布を合わせる	<ul style="list-style-type: none"> ・表布と裏布をゆるく中綴じした。 ・表布と裏布が相互に影響しないようにするため、後ろ身頃と後ろパネルラインの縫い代は上下各8cm、表袖と裏袖の後ろ縫い代は上下10cm中綴じしない工夫をした。 ・裾の始末をした。 	

<p>衿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・接着芯を貼った表布に、出来上がり線に合わせてインサイドベルトを接着した。 ・身頃と衿を縫い合わせ、内側には詰襟を再現するために白衿をまつり付けた。 	
<p>袖付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いせ分量の配分が一部に偏らないように身頃と袖を細かくピンで留め、仮縫い後ミシンで縫い合わせた。 ・しつけ糸で縫い代に拵綿と肩パッドを留め付けた。 ・裏袖は表袖同様ぐし縫いで整え、裏身頃にピンを細かく打ちながらまつった。 ・袖ぐり底には星止めをし、縫い代のかさばりを抑えた。 	
<p>ボタン</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・身頃と毛流れを合わせ、クルミボタンを付けた。 ・クルミボタンの裏側には大きなスナップを付け、着脱がスムーズに行えるよう配慮した。 	

4-6. パンツ・ベルト

パンツは既制服の中から当時のシルエットに近いものを用意した。より再現度を高めるため、フィッティングの際にパンツの幅もそれぞれに合わせて細く調節することにした。

ベルトは、厚みがありしっかりとしている黒牛革、厚さ2mm、幅50mmを使用した。裁断面はコバ仕上げを行い、真鍮製バックルはネジで固定し、装飾のスタッズを付けた(写真8)。



写真8 ベルト

4-7. 最終フィッティング

以上の縫製を終え、最終フィッティングを行った(写真9)。フィッティングは概ね順調であったが、柿嶋氏の袖丈を2cm短く修正することとした。ギターやベース等楽器を弾く際に、袖が短いほうが良いとのアドバイスを受け、その配慮のためである。次にジャケットを着用した状態で腰の位置にベルトを合わせ、ベルト穴の位置を決定した。実際に着用して暑いとの感想があったが、ステージ上は照明や演奏の熱気でさらに暑くなるのが懸念される。パンツを着用してもらい、当日のシューズ(ショートブーツ)を想定し、裾上げを行った(写真10)。最終的に裾にゴムを縫い付け、ヒールに掛ける予定であるため、そ

れを考慮した長さに設定した。パンツ幅も全体の幅を細めることでより忠実な再現を目指した。更にウエストを微調整するなど補正を行った。

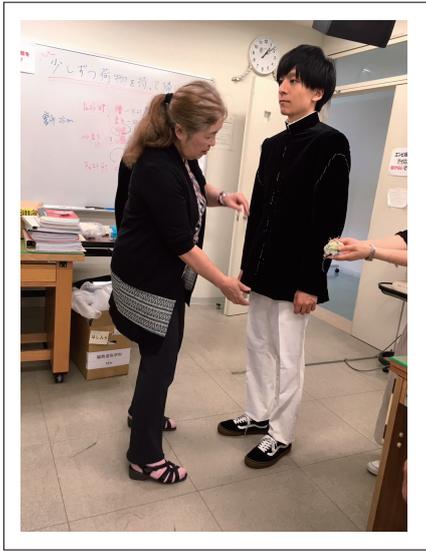


写真9 最終フィッティングの様子



写真10 パンツ丈を調節する様子

4-8. 仕上げ

ジャケットにスチームアイロンをかけ、ベロアの毛を起し毛並みを整えた(写真11)。同一の衣装のため、混同を避ける目的でザ・タイガースのメンバーカラーを用いて色分けした。身頃とパンツの裏にそれぞれのカラーリボンを縫い付けた(瞳氏:ブルー、稲村氏:赤、手島氏:紫、柿嶋氏:黄色、石橋氏:緑)(写真12)。さらにベルトに型押しで名前を入れ、区別した。パンツのくせとりをし、ヒップを立体的に整え裾にゴムを縫い付けた(写真13)。検針器による最終確認をし、衣装を納品した。

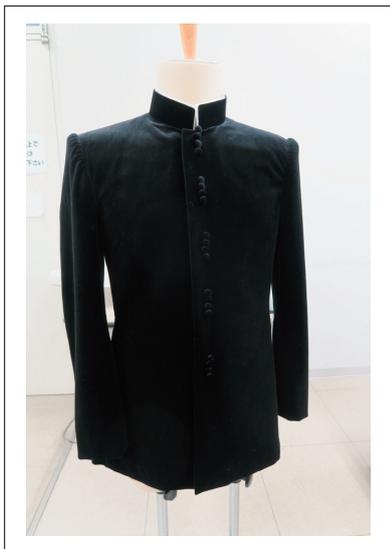


写真11 完成したジャケット

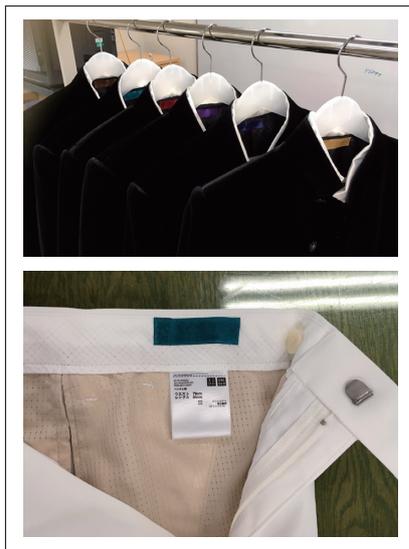


写真12 リボンで色分けした衣装



写真13 完成したパンツ

5. まとめ

2019年7月14日、当日の会場である和洋九段中学高等学校講堂で行われたゲネプロにご招待いただき、実際のステージでの演奏を見学した(写真14、写真15)。写真16は瞳みのある氏の衣装装着時の写真である。

2019年7月15日、和洋九段中学高等学校講堂で「瞳みのる One Day ひとりタイガース」の公演が開催された。コンサートは多くのファンが来場し、大盛況のうちに終了した。瞳氏やザ・タイガースの楽曲はもとより、衣装の復刻を楽しみにしていたファンも多く、再演を希望する声も多々あるなど、好評であったとの報告を受けた。本取り組みを通し、衣装には演者やそのパフォーマンス、また楽曲をより引き立て、魅力的に魅せる力がある事を再認識することができた。

コンサート終了後、製作した衣装は全て大学に返納された。今後は、服飾造形学科の学びの紹介として、オープンキャンパス等での展示や広報に広く活用したいと考えている。



写真14 ゲネプロの様子



写真15 ゲネプロを見学した服飾造形学科教員・助手・助手補と瞳みのる氏・One Day Special Bandでの記念撮影

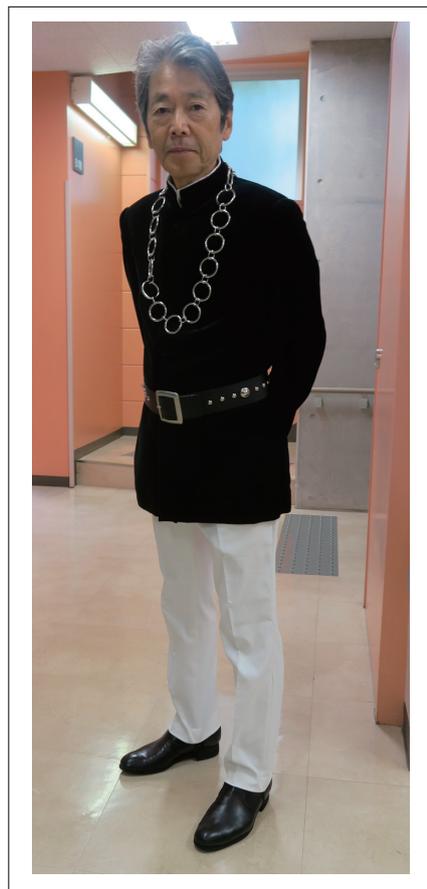


写真16 瞳みのる氏の着装写真

6. 終わりに

本報では、産学官連携の一環として、外部からの依頼を受け衣装製作に取り組んだその過程を報告した。懸念していた通り、限られた期間の中で衣装の忠実な再現という条件を満たす作品を製作するためには、徹底したスケジュール管理が必要不可欠であり、最も留意すべき点であった。プロジェクトに当たって、納期の厳守など懸念されるべき要素はあるが、実際の経験でしか学び得ることのできない点は数知れず、学内の授業だけでは得ることのできない、大きな教育効果を期待できることが確認できた。短期間で一連の流れを経験することができた今回の取り組みでは、外部との連携プロジェクトを導入する第一歩となる基盤をつくることができたといえる。今後は、授業に発展させることを目指し、継続的な取り組みになるよう、環境やサポート体制を整えていきたい。

謝辞

衣装製作のご指導をいただきました塚本教授、嶋根教授、貴重な機会を与えてくださった金子副学長、瞳みのる氏、One Day Special Bandの皆さま、衣装製作や広報活動にご協力賜りました、学内外すべての方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

引用文献

- [1] 磯前純一・黒崎博之 (2015). 「ザ・タイガース研究論—昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析—」 近代映画社
- [2] 石原英樹・宇井洋・大井夏代・三浦恵美子 (1995). 「ストリートファッション若者スタイルの50年史」 アクロス編集部
- [3] 磯前純一・黒崎博之 (2015). 「ザ・タイガース研究論—昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析—」 近代映画社

木村 知世 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)
鈴木 春佳 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)
今井 悠瑚 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)
海老名理紗子 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手補)
玉利 舞花 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手補)
中澤 聡美 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)
横森 千佳 (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)
田中あゆみ (和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 助手)

(2019年11月15日受理)